

ケアマネの出会った 家族たち

3

～ 家族理解と 家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～ 独居老人と娘の物語 ～

三年間の歩み

「あの人は、本当に変わらない頑固な人ね。きっとあの性格は死ななきゃ治らないわね。」「いや、あの人のあの性格は死んでも治らないかもね。」などという会話をしたことはありませんか。私たちの日常の会話で、誰かとこんなやり取りをした経験を、一度や二度お持ちではないでしょうか。

本当に、人には変わらない、治らない性格や生き方というのはあるのでしょうか。私たちは、生きている間、個人の事情だけではなく、様々な社会情勢や、社会の仕組み、価値観などに影響されて生きています。「時代が変わった。」と、嘆きながらも世の中の変化に対応しようと、生きるスタイルや考え方に変化を受け入れ生活している人もいれば、「そんなわけのわからないことは、自分には関係ない。」と世の中の変化に背を

向け、自分の歩んできた歴史や価値観を必死に守って生きている人もいます。

変化を受け入れる、受け入れない、一見相対していますが、自分を取り巻く状況に、身の置き方を考え決定しているのだから、その人のこれまでの生き方にはない変化が、他人には見えない所で起こっているのではないのでしょうか。

私は日々の生活の中で、あるいは対人援助の場面を通して多くの人に出会い、人は日々変化を続けているのではないかと感じます。「あの人は変わらない」のではなく、変わったことに、周囲の人が気づいていないのだと思うのです。または、周囲の人は他者に対して大きな変化を求め過ぎているのではないかとと思うのです。

人はそんなに簡単には変化しないかもしれませんが、生きているということは周りの様々な状況に対応している必要があり、必然的に変化を迫られている、だか

ら人は変わるのだということ、小さな変化を見逃さないこと、その小さな変化の意味をしっかりと捉えることが、対人援助の場面では大切な、と感じます。

人は変わる

援助開始一年目・親子の葛藤

(*以下に登場するのは、当マガジン2号の連載に登場する一子さんと同一人物です。ご覧になっていない方は、ぜひ2号もお読みください。)

一子さんは、30年前にご主人を亡くして以来一人暮らしです。一人娘が隣町にいますが、長年娘を頼ることなく生活しています。そんな一子さんが、最近、立て続けに体調を崩しました。近隣住民は、一子さんの暮らしを心配しています。介護保険サービスを利用すれば、もう少し安心な生活になるのでは、という周囲の心配の気持ちから、相談はケアマネへ繋がりました。支援開始にあたり、契約や今後のことも含め、娘の意向も確認したく初回訪問の前に、娘へ連絡をしました。娘は電話口で、「体調が悪く母親のところには行けない。契約やサービスのことはお任せします。」と言葉があります。体調が悪いという言葉に、無理強いしてもという思いもあって、初回訪問には娘の同席を強くは求めませんでした。ケアマネが一子さんを訪問しましたが、本人は独居生活への不便も不安も感じていません。室内の散らかりや、ため込んだゴミの不衛生な状況から、なんとか説得して介護保険サービスの利用を始めることになりました。

訪問後、本人と話し合った内容や、今後利用する予定のサービスなどの報告も兼ねて娘へ電話し内容を伝えました。「わかりました。宜しくお願いします。ご迷惑をおか

けします。本当は施設にでも入ってもらいたいのですが・・・」と言葉がありました。この時ケアマネは、一子さん自身の希望や、誰かの見守りがあれば在宅生活の継続も可能な時期だと判断していたこともあり、娘の言葉の奥にある気持ちを察することが不足していました。

それから一年ほど、一子さんは介護サービスの利用や、近隣住民の手助けにより生活が続きました。けれども、一子さんの認知機能低下がもたらす、物忘れや近所の人に対する被害妄想などが周囲との不協和音となっていました。そして、母親の元を訪れることのない娘に対しても周囲の人は不満を覚えます。ケアマネは、娘へ連絡し最近の生活状況について伝え、可能であれば一子さんへの協力を要請しました。娘は、電話口で以前と同じように、自身の体調不良を訴えます。

支援開始二年目の壁

ここで、一子さんと娘への支援が難航します。一子さんの周囲では心配や不満の声が聞こえますが、状況を打開する変化がありません。ケアマネは、支援の困難さからスーパービジョンを受けました。その中で、援助者としてのケアマネがしていなかった事に気づきました。それは、援助を展開する上で非常に重要なことでした。

一子さんの娘にとって、ケアマネは何をする人なのでしょう。ケアマネの事を「母の生活を支援する人」という認識はあったかもしれません。でも自分(娘)にとって、ケアマネは何をしてくれる人と理解していたでしょうか。ケアマネの役割をしっかりと娘に伝えていなかったのです。援助者として大失敗です。ケアマネが何をしてくれる人かも分からずに自身の抱える悩みや心を開けるわけがありません。言葉で相手が

理解できるように伝えることは重要です。

「私には、娘さんの思いや悩みも一緒に考えていく役割があります。」ケアマネが改めてこの言葉を伝えた時に、娘の対応に変化が見られました。その後娘宅に訪問した時、「離れて暮らす母の事は心配していたけれど、長年の母との関係性に葛藤があり、どうすることもできず悩んでいた。」という思いを聞きました。そして、直接的な関わりは無理でも陰ながらできることはします、と言葉があったのです。それから、一子さんの妹への連絡をとってくれることになりました。妹は、電話で頻繁に一子さんの様子を気に掛けるようになりました。娘、妹、ケアマネの三者間の連携が取れるようになったのです。一子さんを取り巻くシステムに変化が起きました。家族システム論では、家族のどこに変化が起こってもいいのです。どこか（誰か）に変化があると結果も変化します。

その後、娘や妹の存在も確認しながら、一子さんへ今後どのように一人暮らしをしていきたいかを確認しました。一子さんは、「年寄りだから皆に心配されるけれど、なるべく迷惑をかけないで暮らしたい。近所の優子さんは、良くしてくれるから何でも相談できるし、優子さんの言うことは聞いて行きたい。」と答えました。

そして、一子さんは近所の優子さんや介護サービスに支えられ、生活できています。一子さんの気が付かないところで、母を心配する娘の存在もあります。長年、一子さんと娘には親子の葛藤がありました。多少の一人暮らしに困難が出てきたからと言って、急に娘に難題を押し付ける事は娘の生活にも悪影響です。世代間の境界を意識して、親世代、子世代のそれぞれの生活が守られるような援助が必要だったのです。

支援開始三年目の変化、新たな親子関係さて、一子さんの生活も、近所の優子さんや隣町に住む妹の支援により継続できていました。しかし、一子さんのもの忘れや生活上の困難さは以前より悪化してきているようです。再び、周囲の人に対する被害妄想（物を盗まれた、ゴミを玄関に入れられる）が増してきます。そんな中、時折支援をしてくれていた妹の体調不良により、今後の支援が難しくなったという状況が発生。今後の本人への支援にはやはり娘の協力が必要となりました。

ケアマネは、娘と一子さんの今後の生活について話をしました。一子さんの今後の生活に対して、娘としては直接的な支援は難しいという主張は以前と変わりありません。では今後の一子さんの生活について、本人の権利が守られるようにしていくにはどうしたらよいか考えました。今後、一子さんの生活上の判断や決定が必要な場合のサポートとして、成年後見制度の利用について考えられました。重要な決定は後見人にサポートしてもらおう、ということです。そして娘は、できるだけ一子さんとは距離をおいていきたいという意向です。

成年後見制度の利用にあたっては、本人の了解を得る必要があります。そこで娘に、本人へ成年後見制度の手続きを進めることについて了解を得ることを課題としました。これまで、母親と直接的な関わりを絶っていた娘には、厄介な課題でもあります。一子さんが制度利用に同意するか、手続きに協力的になってくれるか、等々まだ始まっていない今後についての不安が次々に思い浮かんで母親との関わりに躊躇します。考えあぐねて、状況を固定させてしまうか、まずは最初の一步を踏み出して次につなげるかの選択です。娘は迷いながらも、やはり最初の一步を踏み出す決意をします。早

速、母親の元を訪ねる日を決めケアマネも一緒に同行することとしました。娘が一子さんの元へ来るのは2年ぶりです。

「これから、行くから家で待っていてね。」そんな電話連絡の後、娘とケアマネは一子さんの元へ訪ねました。玄関でインターフォンを鳴らすと、「洋子（娘の名前）かい。ちょっと待ってね。」と、足早に玄関に迎えに出る一子さんの姿がありました。それは、久しぶりの娘の訪問を喜んでいる母親の姿です。一子さんが、玄関のドアから顔を出しました。普段見たこともないような、ござっぱりしたワンピース姿でした。きっと、娘の訪問が楽しみだったのでしょう。横にいるケアマネの姿を目にし、「あれ、一緒に来たのかい。何か用事があるのかい。」と声のトーンは少し低くなりました。玄関先でのあいさつを終え、部屋の中に入りました。

娘は、一子さんの今後の生活について、妹の支援が難しくなった現時点では、娘の支援も困難であることを伝えました。今後、財産管理や様々なサービス利用などの契約に関しては、成年後見制度の利用によって、娘の手助けがなくても生活できるようにしてほしいと訴えます。また、今後の生活についても、いつまでも一人暮らしは難しいのだから、入所施設のような所に入って安心した生活を送ってはどうか、と提案します。

久しぶりの対面の後、娘の口から出た言葉に一子さんは伏し目がちです。しかし、長年一人暮らしを続けてきた一子さんらしい毅然とした様子で話し始めます。「そうだね。洋子に迷惑かけるわけにもいかないし、年寄り一人で生活していたら、みんなに迷惑かけるからね。私なら、施設に入って生活したほうが、返って気楽だし、安心だね。そうしなさい、って言うなら、そうするよ。」あっさりした返答です。そして、成年後見

制度についても、「洋子に迷惑かけないようにできるなら、なんでも（制度の）お世話になるよ。手続きのことはよくわからないから、やってくれるのなら、私は構わないよ。」潔い言葉です。

そこで、今後について、成年後見制度の利用手続き、施設入所手続きの進行について本人の同意を確認しました。

なるべく、早くに母親のもとから離れたい娘は用件を確認すると「じゃあまたね。」と話を切り上げました。一子さんは、少しさみしげな表情もありましたが、玄関で娘の姿を見送りました。

本人の意思の確認が取れたところで、娘は、ケアマネや地域包括支援センターの社会福祉士の助言により、成年後見制度の手続きや施設入所に必要な手続きを進めます。これらの手続きが完了すると、娘と一子さんの関わりは少なくなることも予想できたので、手続きの段階ではできるだけ、娘と一子さんがやり取りしながら準備が進められるように、ケアマネの関与は必要最小限に努めました。

制度利用の申請に必要な書類が揃い、いよいよ申し立て、という段階に入った時のことです。娘からケアマネに一本の電話が入りました。

「必要な書類はだいたい揃いました。でも、今回の事で母とのやり取りをしているうちに、これまで私のことを信用してくれていなかったのが、お金の管理も私にさせてくれるようになりました。施設入所の手続きも進められたことや、入所が決まるまでは、ショートステイ（短期間の施設入所利用）の利用に同意してくれたことなど考えると、成年後見制度の利用をしなくても良いかなと思えるようになりました。施設に入るまでは私が金銭管理を手伝えれば良いし、成年後見制度を利用しても、日常の支援は私が

しなければならぬことも出てくるでしょうから、制度利用の申し立てはせずに様子をみようと思います。」そんな言葉が娘の口から出ました。

成年後見制度の手続きに必要なやり取りが、今まで疎遠だった二人の関係に変化をもたらし、双方の気持ちにも今までとは違う思いが湧いてきたのでしょうか。それは、それで結果オーライです。成年後見制度の申請はしないまま、手続きは中断しました。そして、施設入所できるまでの期間は、娘が一子さんの金銭管理をすることになり、これまで行き来の無かった二人に電話や訪問のやり取りが始まりました。

そして、施設入所が決まるまでの間、繰り返しショートステイの利用を始めました。初めて利用したショートステイでしたが、施設の中には、昔ながらの知人の姿があり、三食が提供され、なんの不安もなく過ごせる快適さに「こんな良いところはない。」とショートステイを楽しんでいます。

今、一子さんは施設入所が決まるのを待っています。認知機能低下は徐々に進んできており、金銭管理ができなくなり、物忘れも進んでいます。話す内容も首尾一貫できず、何度も同じ話を繰り返し、時には、近所の人や娘に対して泥棒呼ばわりすることもあります。それでも、そんな母親を娘は、「仕方のないこと。」と自分に言い聞かせながら娘としてできることをしています。そのことが、一子さんの口からは「洋子がしてくれるから、何も心配はない。」という言葉で表現されています。最も娘に対する感謝の言葉の直後に娘に対する被害妄想発言も出たりするのですが・・・

一子さんと娘には長年の親子の確執がありました。疎遠になってしまった親子関係の急な修復は難しいとの判断をし、それぞ

れの道を選択できるようにと支援をしていく中で、これまでにない一時的な変化（成年後見制度の利用に関する手続きのためのやり取り）が二人の関係に新たな絆を生みました。

人は変わる、長い年月という時が人を変化させる、そしてこれまでにない状況が人を変化させるのだと思いました。

長い間母親との関係に悩んでいた娘が、自分自身を少し変化させることができ、今後の母親に対する関わり方に背負っていた重たい荷物をほんの少し下ろすことができたようです。

そして、母親のことに対して動き始めた娘の支えになっていたのが、娘の夫でした。母親のことを考えると憂鬱な気分になってしまい、家庭内にも暗い雰囲気が漂っていた娘の家庭でしたが、この件を通して（当初の夫婦の目的は、制度利用につなげ母親との関係に距離を置きたいというものだった）娘夫婦が力を合わせて諸手続の進行をしました。その夫婦の協力関係が夫婦の絆を強くしたようです。当初の目的とは違う形で親子の関係も再開しましたが、今では母親の困った発言も、夫婦で話題にしながら対処していくことができています。

人は変わる。そして、変わった人の目に映る新しい景色が、それぞれの人生の未来への希望の光となっていくのではないでしょう。

* プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。